HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	送る言葉
著者	菅，泰雄；SUGA，Yasuo
引用	北海学園大学人文論集(54)：22-23
発行日	2013-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

送る言葉

菅　　泰雄

人文学部日本文化学科・大学院文学研究科小野寺静子教授が 2013 年 3 月 31 日でご退職されるにあたり，送る言葉を述べることにいたします。

小野寺先生は，2001 年 4 月に札幌大学から本学人文学部・大学院文学研究科教授として着任されました。ご専門は上代文学万葉集で，『大伴坂上郎女』『坂上郎女と家持　大伴家の人々』の御著書に見られるように，万葉集の最終的編纂者とされる大伴家持，その父旅人を中心とする大伴一族を中心に研究をなさっています。

私事になりますが，先生との出会いは私が大学 2 年生の時のことでした。当時先生は，北大国語国文研究室の文部教官助手をなさっていました。新進気鋭の万葉の研究者でいらっしゃいました。助手ということで講義を担当されてはおらず，直接講義を受けることはありませんでしたが，「助手」という存在は，学生にとっては年齢も近く，勉学上のことをはじめ，気軽に何でも相談できる大いに頼りになる存在でした。また，国語学（それも現代語）を専攻する学生だった私は文学や古代領域のことは敬遠していたのですが，それでも学部の授業では，小野寺先生の師匠筋にあたる大久保教授の「万葉集」の講義や，その後，大学院では五味智英先生の集中講義などもあり，履修せざるを得ませんでした。また，国語学の勉強をする上では，上代語ということで「万葉集」に関わらざるを得ないことがありました。そのような時に頼りになったのは，先輩の院生や助手の先生でした。

私が修士の 2 年に進級した 4 月には，先生は札幌大学に転出なさいました。大学院に進んだはいいが，将来はどうなるかお先真っ暗の私にとっては，お手本となる先輩でもありました。その後，25 年ぶりに再び，本学で巡り会うことになったわけです。

先生が本学にお迎えしようという話を耳にしたとき，ぜひ実現してほしいと切に願っていました。そんな折り，先生から突然「北海学園大はどんな雰囲気の大学か」というお電話をいただきました。迷っていらっしゃる様子であったので，ここは何としても来ていただきたいとの思いで，いろいろと本学の事情を長時間にわたりお話ししました。今思えば，嘘は言わなかったとはいえ，いわゆる仲人口になったかもしれません。決断されるにあたって，どの程度参考になったかはお聞きしませんでしたが，先生をお迎えできたことは幸いでした。ただ，移籍なさって後悔していらっしゃらないかいつも心配ではありました。

学生たちは先生のことを親しみを込めて，「しずちゃん」と呼んでおりました。「しずちゃんって誰のこと？」「日本文学史の小野寺先生。」「それなら，しずちゃんではなくて，せいこちゃんというべきだよ。」と訂正しておいたのは言うまでもありません。

帰る方向が同じということもあり，火曜日のゼミの日など，帰りの地下鉄の中でいろいろとお話できてよかったのですが，ただ，一つ心残りなことがあります。日本文化演習の引率ではご一緒する機会に恵まれず，万葉の旅を案内していただけなかったことです。

この原稿を書いている今，旧暦の新年が近づいています。外はしんしんと雪が降っています。

新しき　年の初めの　初春の　今日降る雪の　いやしけ吉事

（家持・4516）

万葉集の最後に収録されている歌を思い出し，小野寺先生を送ることばとさせていただきます。先生にはご退職後もお元気で一層のご活躍をお祈り申し上げますとともに，今後ともご助言，ご指導くださいますよう，お願いいたします。